

キウイフルーツ

(黒ボク土)

〔土壌肥料〕

耐水性は劣るので、透水性、孔隙率が高く、有効土層が深く、膨潤な、しかもある程度保水性のある土壌が適する。このため、地下水位の高い場合には排水対策を実施する。さらに、完熟堆肥などの有機物施用により孔隙率を高める必要がある。つる性で生育はとて旺盛である。根群分布は全般的に浅く、軟らかく太めの支持根から細根が発生している。追肥時期が遅れると枝の遅伸びや果実品質に影響が出る。比較的少ない肥料で旺盛に生育するので、樹の生育、収量、土壌状態などを毎年観察し施肥を行う。

土壌表面管理としては、清耕法、有機物によるマルチ法などがある。敷ワラなどのマルチは蒸散の防止と土壌水分の有効利用に役立つ。土壌中の有機物を増加させ、土壌団粒化の促進を最大限に生かす工夫をする。

〔病害虫・雑草防除〕

果実軟腐病、灰色かび病は枝上の枯死部分や園内に残されたせん定枝などが伝染源である。また、過繁茂で園内が過湿となると発生しやすい。

かいよう病、花腐細菌病は、葉が繁茂している通風の悪い園で発生が多いので、適正なせん定、肥培管理に心がける。害虫の多くは、粗皮下で越冬するので、骨格枝にこもを巻き春先焼却することや、粗皮削り、落葉・せん定枝の圃場外への除去など耕種的防除が大切である。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	深耕時に堆肥を計画的に施用する。その際断根を極力少なくする。 有機物(または堆肥)によるマルチ施用。堆肥は完熟した低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で窒素、カリ含量が1%以下の完熟したものを)を施用する。	有機物 (または堆肥) 1~2t/10a
化学肥料 低減技術	根域への表層施用を基本とする。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20~50%
化学農薬 低減技術	機械除草を行う。 ニワトリ等の除草用動物を利用する。 BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハマキムシ類、ケムシ類)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	基肥は落葉後早く施用する。追肥の時期は、遅すぎると遅伸びや果実品質に影響するので注意する。 若木のうちは樹冠下清耕またはマルチ法とし、樹との養水分の競合をさける。 落葉・せん定枝などの圃場外への除去が有効である。防除適期を把握し、遅れないようにする。 (対象:果実軟腐病、灰色かび病、かいよう病、花腐細菌病) せん定を行い、風通しを良くする。 (対象:果実軟腐病、灰色かび病、かいよう病、花腐細菌病) こも巻きや粗皮削り (対象:害虫全般) 適正な栽植本数とし、1樹あたりの樹冠面積を広げすぎないようにする。 施肥量の基準は樹齢、樹体に応じたものとする。	

キウイフルーツ

(灰色低地土)

〔土壤肥料〕

耐水性は劣るので、水田や地下水位の高い場合には、透水性、孔隙率が高く、有効土層が深く、膨潤で排水良好で、しかもある程度保水性のある土壤が適する。このため、すき床破壊や盛り土など高畝栽培などの排水対策への配慮が必要である。さらに、完熟堆肥などの有機物施用により孔隙率を高め必要がある。つる性で生育はとても旺盛である。根群分布は全般的に浅く、軟らかく太めの支持根から細根が発生している。追肥時期が遅れると枝の遅伸びや果実品質に影響が出る。比較的少ない肥料で旺盛に生育するので、樹の生育、収量、土壤状態などを毎年観察し施肥を行う。

土壤表面管理としては、清耕法、有機物によるマルチ法などがある。敷ワラなどのマルチは蒸散の防止と土壤水分の有効利用に役立つ。土壤中の有機物を増加させ、土壤団粒化の促進を最大限に生かす工夫をする。

〔病虫害・雑草防除〕

果実軟腐病、灰色かび病は枝上の枯死部分や園内に残されたせん定枝などが伝染源である。また、過繁茂で園内が過湿となると発生しやすい。

かいよう病、花腐細菌病は、葉が繁茂している通風の悪い園で発生が多いので、適正なせん定、肥培管理に心がける。害虫の多くは、粗皮下で越冬するので、骨格枝にこもを巻き春先焼却することや、粗皮削り、落葉・せん定枝の圃場外への除去など耕種的防除が大切である。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	深耕時に堆肥を計画的に施用する。その際断根を極力少なくする。 有機物(または堆肥)によるマルチ施用。堆肥は完熟した低成分含量堆肥を施用する。	有機物 (または堆肥) 1~2t/10a
化学肥料低減技術	根域への表層施用を基本とする。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で施肥基準以下 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~30%
化学農薬低減技術	機械除草を行う。 ニワトリ等の除草用動物を利用する。 BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハマキムシ類、ケムシ類)	慣行使用回数の 20%減
その他の留意事項	<p>基肥は落葉後早く施用する。追肥の時期は、遅すぎると遅伸びや果実品質に影響するので注意する。 若木のうちは樹冠下清耕またはマルチ法とし、樹との養水分の競合をさける。 落葉・せん定枝などの圃場外への除去が有効である。防除適期を把握し、遅れないようにする (対象:果実軟腐病、灰色かび病、かいよう病、花腐細菌病) せん定を行い、風通しを良くする (対象:果実軟腐病、灰色かび病、かいよう病、花腐細菌病) こも巻きや粗皮削り (対象:害虫全般) 適正な栽植本数とし、1樹あたりの樹冠面積を広げすぎないようにする。 施肥量の基準は樹齢、樹体に応じたものとする。</p>	